# 【重点分野－１】 「２０２２連合アクション」
# 若者とともに進める参加型運動に向けた取り組みについて＜その２＞

Ⅰ．主旨

・社会運動に参加意向があっても参加できていない 10 代・20 代の思いを受け止める運動の推進に向け、「『2022 連合アクション』若者とともに進める参加型運動に向けた取り組みについて＜その１＞」を提起し（2021 年 12 月中執確認）、Ｚ世代を対象とした社会運動調査や次世代を担う若者との意見交換などを通じて、「若者とともに進める参加型運動の考え方」を整理した。
・上記を踏まえ、7 月「05 れんごうの日」と連動したイベントを皮切りに、連合組織内における「考え方」の共有、および好事例・先進事例の収集・展開をはかる。
・さらに「2023 連合アクション」の具体的な取り組みの中で、上記考え方にもとづく実践的な運動にチャレンジするとともに、検証・評価を行い、2022～2023 年度運動方針で掲げた第 17 期連合運動の基軸である「新しい運動スタイル」の構築に向け、若者の視点も取り入れていく。

Ⅱ．背景

〇2020 年、新型コロナウイルス感染症が人々の生活に深刻な影響をおよぼす中、連合は「コロナ時代を考える有識者との緊急勉強会」を開催。様々な分野の有識者から長期化するコロナ時代の対応について「提言」を受けた（月刊連合 2020 年 8･9 月合併号、10 月号、11 月号掲載）。その中で、富永京子准教授（立命館大学）は、日本人の「社会運動ぎらい」を指摘しつつも、コロナ禍で「＃ハッシュタグ」を用いたＳＮＳ経由のオンラインデモなどが支持を集めていると報告。それを受け、連合は、多様化する社会運動と人々の意識について調査を行った（2021 年 4 月公表「多様な社会運動と労働組合に関する意識調査 2021」）。

〇前述の調査結果では、10 代の 6 割、20 代の 5 割が労働組合や社会運動は「必要」と回答しつつも、その多くが実際の参加には至っていない状況が明らかとなった。これらを踏まえ、「2022 連合アクション」（2021 年 9 月中執確認）において、社会運動に参加意向があってもできていない 10 代、20 代の思いを受け止める運動の推進を確認した。

〇その後、「『2022 連合アクション』若者とともに進める参加型運動に向けた取り組みについて＜その１＞」（2021 年 12 月中執確認）にもとづき、「Ｚ世代が考える社会を良くするための社会運動調査 2022」を実施。その結果を踏まえ、社会運

動を牽引する若者、社会運動の研究者、構成組織・地方連合会の次世代を担う若者との意見交換を実施してきた。

## Ⅲ．調査結果等から見えた現状・課題と今後の方向性

### １．「Ｚ世代が考える社会を良くするための社会運動調査 2022」（2022 年 3 月公表）

15 歳から 29 歳までのＺ世代を中心とする一般の若者 1500 人にモバイル調査を実施。約 9 割が社会課題に関心があると回答。「身近」な課題に関心が集まる中、「社会人Ｚ世代」は「長時間労働（ワーク・ライフ・バランス）」、「学生Ｚ世代」は「ジェンダーにもとづく差別」が関心のトップであった。また、社会運動について、3 人に 1 人の割合で参加経験があるものの、「集会やデモ」などを忌避、「成果」と「わかりやすさ」が期待されていることも明らかとなった。

### ２．有識者との意見交換（月刊連合 2022 年 3 月号掲載）

調査結果を受けて、社会運動を牽引する若者、社会運動の研究者と意見交換を実施。有識者は、今の若者は貧困や格差が自らの課題であり、身近で当事者性の高い課題に関心が集まりやすいと分析。一方で、日本のデモは動員型で対話が乏しく、それが忌避感につながっていると指摘。労働運動への期待として、労働問題は当事者性が高いため、対話を通して身近な問題を解決し、成果をアピールすることで、労働組合は若者にとって『頼れる存在』となり得るとの助言を受けた。

### ３．構成組織・地方連合会の次世代を担う若者との意見交換（別紙）

調査結果や有識者の考察を踏まえて、構成組織・地方連合会の次世代を担う若者計 126 名と「新しい運動スタイル」のあり方について意見交換を行った。意見交換では、労働運動の課題について率直な意見とともに、労働組合は「人とのつながり」「対話」が重要だからこそ、若者に共感される工夫、ＳＮＳの積極的な活用、労働運動の理解促進、イメージアップなど具体的な取り組みが必要として、多くのアイデアが出された。

## Ⅳ．若者とともに進める参加型運動の考え方

次世代を担う若者の「理解・共感・参加」が得られる運動をめざして、上記の調査結果や意見交換などを踏まえ、若者へのアプローチ方法などの考え方を整理した。

### １．若者へのアプローチの前提となる基盤整備

#### （１）若者が意見を反映しやすい環境の実現

労働運動に対する若者の考え方は様々ではあるが、世代間ギャップを感じている若者は少なくない。若者とともに運動を進めるには、何に違和感を持ち、何を求めているのか。若者の意見を労働運動に反映できる環境整備が必要である。

【具体的な取り組み例】

〇若者が企画運営に参加できる仕組みの構築や、若者に対する定期的なヒアリングの実施。

〇若者がやりたいことや困っていることをサポートできる体制の整備。

（２）ＳＮＳによる積極的な発信

若者の中には、自分が気になったことを検索エンジンではなくＳＮＳで調べる人もいる。このような傾向が強まると、ＳＮＳを活用していなければ、検索に引っかかることすら出来なくなる。ＳＮＳの積極的な活用は、今後の労働運動に不可欠である。

【具体的な取り組み例】

〇各ＳＮＳの特徴と目的を踏まえた現ツールの精査。

〇ＳＮＳの特徴にあった内容、頻度での更新。

〇検索されやすいような工夫（人気・話題の＃ハッシュタグの付与など）。

（３）若者に対する労働運動の理解促進

若者も、労働運動に「人とのつながり」「対話」が重要と考えている。一方で「なぜすべての働く仲間のために」「なぜ政治に取り組むのか」など疑問の声もあるため、労働運動の目的や意義などの理解促進に向けた取り組みを推進する。

【具体的な取り組み例】

〇すべての働く仲間のために取り組む必要性や、社会課題について取り組む目的など、セミナーなどを通じて理解促進をはかる。

〇動画などの学習機材を作成し、ホームページやＳＮＳを使って労働運動の目的や取り組みなどを発信する。

（４）地域・学校と連携した次世代を担う若者への労働運動の理解活動

学生をはじめとする次世代を担う若者を対象に労働組合・労働運動の理解促進をはかることは、学生時や卒業後の労働トラブルの防止・解決はもとより、労働運動を次世代につなげるためにも極めて重要である。また、地域・学校との連携強化は、地域に根差した労働運動の促進につながる。

【具体的な取り組み例】

〇労働組合イベントへの組合員や地域の子どもたちの参加促進。

〇出前講座や職場見学などにおける、働くことやワークルールを学ぶ機会の提供。

〇社会貢献活動などを通じた「頼れる存在」としてのアピール。

２．労働運動のイメージアップ

（１）運動の意義・目的の明確化と周知

それぞれの運動の目的は何か。それをどのようなかたちで行うことが効果的なのか。それらが、参加者を含めて理解されないまま実施すると、意義が感じられず、労働運動全体のイメージにも影響を及ぼす。目的や意義の明確化と発信を行う。

【具体的な取り組み例】

〇目的の明確化や与える影響などを踏まえた、運動の見せ方の検討。

〇運動の目的と意義の発信・周知（ＳＮＳ等での事前発信など）。

〇女性や若者、外国人など多様な仲間が参画する運動の検討。

（２）参加方法の多様化（リアルとオンラインの融合）

労働運動に参加したくても、顔を出したくない、休みが取れない等、個々には様々な事情がある。より多くの人に参加してもらうために、リアル、オンラインともに多様な参加方法を用意した上で、参加者が参加感を得られるような工夫を行う。

【具体的な取り組み例】

〇多様な参加方法による参加者数の増大。

〇参加方法によらない双方向コミュニケーションの実現。

〇「インスタ映え」など、参加者からの投稿による波及効果の実現。

（３）エンターテイメント要素の導入

労働運動への参加を促すためには、多くの人に興味を持ってもらう「きっかけ」として、エンターテイメント要素を取り入れ、主催者・参加者ともに「楽しむ」ことができる企画づくりに、積極的にチャレンジする。

【具体的な取り組み例】

〇プライベートでも視聴や参加したいと思えるような取り組みの工夫。

〇対象となる層に応じた取り組みの検討。

〇エンターテイメント要素を加味した、労働組合・労働運動の理解促進。

（４）わかりやすい言葉での発信

連合から発信される文章や言葉は、若者にとって「理解することが難しい」との声が多い。このことが労働運動のマイナスイメージや距離間につながるとの意見もある。知識が無くても理解できる内容で、「知ることができて良かった」「勉強になった」と思われる工夫を行う。

【具体的な取り組み例】

〇必要な知識が学べるような工夫（ホームページやＳＮＳへの情報掲載）。

〇簡潔明瞭で要点を絞った情報提供と詳細情報のリンク。

（５）運動の経過・成果の適宜共有

労働運動の意義や成果が明確ならば運動の重要性を感じてもらえるが、それらがないと参加意欲の低下につながる。運動の手応えや成果、経過状況などを継続的にフィードバックすることで、参加意欲の向上につなげる

【具体的な取り組み例】

〇事例などを交えた、運動継続の重要性やゴールなどの明示。

〇特設サイトなどへの、目的、行動、状況、結果など、一連のプロセスの掲載。

〇小さな成果でも動きがあればフィードバックする機会を設ける。

## Ｖ．今後の取り組み

### １．連合本部

〇7 月「05 れんごうの日」のイベント（テーマ「若者とともに社会運動を」）を皮切りに、連合組織内における「若者とともに進める参加型運動の考え方」の共有、および好事例・先進事例の収集・展開をはかる。

○10 月以降の「2023 連合アクション」の具体的な取り組みの中で、上記考え方にもとづく実践的な運動にチャレンジするとともに、検証・評価を行い、第 17 期連合運動の基軸である「新しい運動スタイル」の構築に向け、若者の視点も取り入れていく。

２．構成組織・地方連合会

○「若者とともに進める参加型運動の考え方」について、連合本部と連携し、理解促進をはかるとともに、好事例・先進事例とあわせて、組織内に展開する。また、単組・組合員に対し連合本部が行うイベント等への参加を呼びかける。

Ⅵ．今後のスケジュール

7 月 29 日（金）7 月「05 れんごうの日」のイベント

以上

別紙

第 9 回中央執行委員会／2022.6.16

## 【重点分野―１】「2022 連合アクション」
## 若者とともに進める参加型運動に向けた取り組みについて
## 「構成組織・地方連合会の次世代を担う若者との意見交換」まとめ報告

「『2022 連合アクション』若者とともに進める参加型運動に向けた取り組みについて＜その１＞」（2021 年 12 月中執確認）にもとづき、新しい労働運動スタイルのあり方の検討に向けて実施した「構成組織･地方連合会の次世代を担う若者との意見交換」について、以下の通り報告する。

Ⅰ．実施概要

2022 年 2 月から 4 月にかけて、「Ｚ世代が考える社会を良くするための社会運動調査」（2022 年 3 月公表）を踏まえて、構成組織・地方連合会の次世代を担う若者 126 名と意見交換を行った。

| 組織名 | 日時／開催形態 | 参加人数 |
|---|---|---|
| 連合 | 2 月 15 日（火）10:55～12:00／Ｗｅｂ | ユースターカレッジ 15 名 |
| 連合岐阜 | 2 月 21 日（月）18:30～19:30／Ｗｅｂ | 青年委員会 3 名 |
| 連合沖縄 | 2 月 25 日（金）18:30～20:00／対面とＷｅｂの併用 | 青年委員会 12 名 |
| 日教組 | 3 月 18 日（金）13:30～15:00／対面とＷｅｂの併用 | 青年部 6 名 |
| 連合東京 | 3 月 25 日（金）15：00～16:00／対面 | 青年委員会 11 名 |
| 電力総連 | 3 月 25 日（金）16:30～18:00／Ｗｅｂ | 青年委員会 11 名 |
| 連合岡山 | 3 月 26 日（土）13:00～／対面 | ユースター委員会 11 名 |
| ＪＲ連合 | 3 月 26 日（土）14:00～15:30／対面 | 青年・女性委員会 5 名 |
| 全印刷 | 3 月 30 日（水）15:00～16:30／Ｗｅｂ | ユースネットワーク 23 名 |
| 連合大阪 | 4 月 18 日（月）18:30～20:00／対面 | 青年委員会 12 名 |
| ＵＡゼンセン | 4 月 21 日（木）10:00～11:30／Ｗｅｂ | ヤングリーブス 5 名 |
| 連合宮城 | 4 月 27 日（水）16:30～18:00／Ｗｅｂ | 青年委員会 5 名 |
| 連合北海道 | 4 月 28 日（木）19:00～20:00／Ｗｅｂ | 青年委員会 7 名 |
| 全体意見交換 | 5 月 27 日（金）18:30～20:00／対面Ｗｅｂ併用 | 上記参加者から 33 名 |

Ⅱ．主な意見

意見交換では、①調査結果や有識者の考察（月刊連合３月号掲載）などの感想、②現在の労働運動、連合運動の課題、③新しい労働運動とこれからの連合の活動について、多くの率直な意見を聞くことができた。意見の多くは、労働運動に関する①周知方法、②実施方法、③フィードバックについてであり、以下の通りまとめて報告する。

１．＜周知方法＞身近に感じられる労働運動を

（１）若者に共感される工夫を

【現状認識】

労働運動について、「世代間の溝が埋まらない」との声や「年の離れた世代」からの呼びかけ、「上から目線」「否定」的な話し方は「恐い」「苦手」と感じる人もいた。

【今後のあり方】

若者へのアプローチ方法として、「年の近い世代からの呼びかけた方が共感を得やすい」との意見が多く聞かれた。実際に、組合活動やデモなどに参加したきっかけは、「年の近い先輩に誘われて」という人が多く、労働運動は「人間関係が大事」との声も多かった。「若者を前面に」「若者の活躍をＰＲ」するべきとの声もあった。

また、「若者にとって身近なテーマで呼びかける」、「熱量を持って話す」、「意見を否定しないで受け止める」、「若者がやりたいことや困っていることをサポートする」ことが、若者の共感を得る上で重要との意見もあった。

（２）ＳＮＳの積極的な活用を

【現状認識】

調査結果で「社会課題に関心を持ったきっかけ」のトップが「テレビ」だったことに対して、「自分はテレビを全然見ないので意外」との感想があった一方で、「ＳＮＳは自分が興味のあることしか出てこない」ので当然との受け止めも多かった。

【今後のあり方】

これからも「ＳＮＳの比重は増す」と考える人が多く、「テレビを見て気になったことはＹｏｕＴｕｂｅなどのＳＮＳで検索」して、「ＳＮＳで発信」するのが今の流れだとして、「連合を検索してもらえるように」、テレビなどのメディア対応をしつつも、「ＳＮＳでの発信に重点を置く必要がある」との声が多かった。

（３）気づけば知っている存在に

【現状認識】

調査結果で「学校」の影響力も大きいことが明らかとなる中、「海外では絵本にデモが出てくる」が、「日本は労働運動を教える文化がない」との指摘があった。

【今後のあり方】

「小さい頃から」、「職場見学」や「出前講座」などを通して、「労働組合に触れる機会が必要」との意見が多かった。

また、労働運動を「知ってもらうきっかけ」に「エンターテイメント要素も必要」として、「労働系ユーチューバーの育成」、「ユニオニオンの活用」、「アニメやゲームの配信」、「有名人とのコラボ」、「人気のハッシュタグ付け」などのアイデアが多数出された。組合活動でも「サークルみたいに工夫」しているとの声も複数聞かれた。

２．＜実施方法＞気軽に参加できる労働運動を

（１）デモ行進のイメージアップ

【現状認識】

労働運動の課題については、デモ行進は「恐い」「過激」「押し付け」などイメー

ジが悪いとの意見が数多く上がった。組合で参加をお願いしても「嫌な顔をされ」、「組合＝デモ」の印象で、「組合は恐くて加入できない」と言われた人もいた。
　理由として、「コロナで参加したことがない」人もいる中、「テレビで過激なデモ」が取り上げられ、「ＳＮＳで叩かれるのが恐い」「顔が出ることに抵抗」との声や「時代に合わせて変化できてない」との指摘も多く聞かれた。
　実際に参加した人では、「おじさんが旗を立ててぞろぞろ歩き、スピーカーを持って『頑張ろう』と叫んでるのはダサい」、「拡声器で声を上げている人を見て、自分は参加できないと思った」「若者の感覚に合っていない」との感想も聞かれた。
【今後のあり方】
　「数の結集を見せることに拘ってほしい」との声もある中、「海外のデモは若者も参加してカッコイイ」、「ＬＧＢＴのデモは華やかで楽しそう」など、「デモもやり方次第」で「なぜデモを行うのか理解が進んでいないだけ」との声も多く、「ＳＮＳの発信で理解と参加を促進」とともに、「若者に継承するためには変化が必要」として、「イメージ戦略」を行い、「名前をパレードにする」「若者やインフルエンサーから呼びかける」、「華やかに音楽を流す」、「飴を配布」などのアイデアが出された。
（２）気軽に参加できる方法を
【現状認識】
　連合の集会などの動画や発信は「専門用語が多い」「難しい」「組合活動の一環でないと見ない」「堅苦しくて若者はクリックしない」「一方通行」との指摘があった。リアル参加も「意識高い系」と言われることや「ＳＮＳでの炎上」を恐れて、「顔や名前を出したくない」との意見も多かった。
【今後のあり方】
　新しい労働運動スタイルについては、「リアルとオンラインの融合」で「集会やデモなどもＳＮＳを活用」し、「わかりやすい発信」を行い、「＃ハッシュタグ運動」など、「顔を出さず」に「気軽に参加」も可能とする必要があるとの意見が多数上がった。また、「各ＳＮＳの役割と目的が異なる」ことを念頭に、「チャット機能」や「コメント返し」を活用して、「参加感が得られる」工夫が必要との意見もあった。
　リアルな運動も参加した若者が将来「主催者側になる」ために「楽しいと思える活動が肝」であり、「イベント形式」や「クイズ形式」など工夫し、「参加者がＳＮＳで投稿」して、「自分も参加してみよう」となる働きかけが重要との声もあった。また、今回の意見交換のように「突撃型イベント」も良いとの意見もあった。
（３）プライベートでも参加できる
【現状認識】
　「平日定時で仕事が終わらない」中、「労働運動は休日」なので、「休日は解放されたい」、「プライベートを大切にしたい」、「家族といたい」、「面倒くさい」との声も多く、「誘っても忙しい」と断られ、メンバーが固定化する課題が聞かれた。
　また、実際に参加しても「集会が内向き」で「内輪の集会というイメージ」で、「各産別の独自色が強すぎてまとまりに欠ける」との指摘もあった。関心があっても「自分ひとりで行くのはハードルが高い」との声も聞かれた。
【今後のあり方】
　「自分の時間を割く価値」をいかに感じてもらうかが重要であり、そのために「まず参加してもらう」必要があるという。「知り合いがいると安心」との声もある中、「家族も参加できる運動」とすることで、「参加しやすい」はもちろん、「子どもの意識も変わり、労働運動を次の世代に受け継げる」効果もあるとの意見もあった。

３．＜フィードバック＞参加して良かったと思える労働運動を

（１）知識がなくても理解できる

【現状認識】

連合の集会に「嫌々動員で参加」しても、「難しくてわからない」、「何をしているのかわからなかった」、「人数要員なので参加意識が低い」、「参加で何が得られたのか」、「労働運動が逆にマイナスイメージになった」との感想が多く上がった。そのため、「知識が中途半端なままで参加したくない」との声もあった。

【今後のあり方】

「最低限の知識を持って参加した方がいい」として、事前に「目的を伝える」、「ＳＮＳで情報発信をする」ことで「共感できる運動」にするべきとの声もあった。一方で、「重要なことにフォーカス」し、「知識がなくてわかる」ようにして、参加で「知識が得られる」、「スキルアップになる」などのメリットを求める声も多かった。

（２）意義を実感できる

【現状認識】

「若者は社会課題に関心が高い」との調査結果は「現場と乖離がある」との感想が多く出た。組合活動については「楽しい」が「役員になるまで興味がなかった」ので、「組合員にどのように伝えるかが課題」との声も多く、労働運動については「すべての労働者のため」となると「組合員のインセンティブが無くなる」との声や、「活動領域を広げ過ぎている」「政治的な活動は敬遠される」との意見も聞かれた。

また、「主催者側が本気で訴える気持ち」がないと「参加する意味が持てない」との声、「スマホなどがない時代は人脈を広げる場にもなっていたが、今は他にも方法がある」、セミナーやＳＮＳが充実している中、「組織として何かをやる意識が低い」、「コロナ禍で人との繋がりが希薄になっている」との指摘もあった。

【今後のあり方】

労働運動について、「各組織の役割の明確化」とともに「組合員への発信と理解が必要」との声もあった。また、「人との繋がり」について、「若者も求めている」「知ってもらう必要がある」として、リアルな「イベントの復活」をしつつも、参加しやすいように「ＳＮＳと連動」することが重要との意見も聞かれた。

（３）成果がわかる

【現状認識】

デモなどに参加して、「運動の成果を期待」しても、「訴えと反対のことが実現して効果がない」、「成果が感じられない」ため、「参加意欲が下がる」、「年々参加者が減っている」との声があった。

【今後のあり方】

「成果はすぐ出せないことも多い」ので、「プロセスに目を向けることも大事」との意見がある一方で、「参加後の成果がわかる」と「自分の参加で変わった」、「自分が役に立った」と思い、「成功体験」として「声を上げること」は「面白い」、「大事」と思うようになるので、「何が変わったかアピール」して、「成果を見せる必要がある」との意見が多かった。

以　上

＼ 2022連合アクション ／

# 若者とともに進める参加型運動

The needs and expectations of young people

JTUC 連合

日本労働組合総連合会

# ＼2022連合アクション／とは？

すべての働く人にとって“必ずそばにいる存在”となる運動の構築

## 具体的な取り組み3本柱

### ① 政策実現に向けた世論形成をはかるための共感型運動

連合の政策・制度実現に向けて、
社会に訴えたい、政策実現をめざすテーマの運動を進める

### ② 「05(れんごう)の日」におけるオール連合型運動

構成組織・地方連合会・連合本部が一体となり、
全国一斉行動・一斉発信で力を集約させる運動を展開する

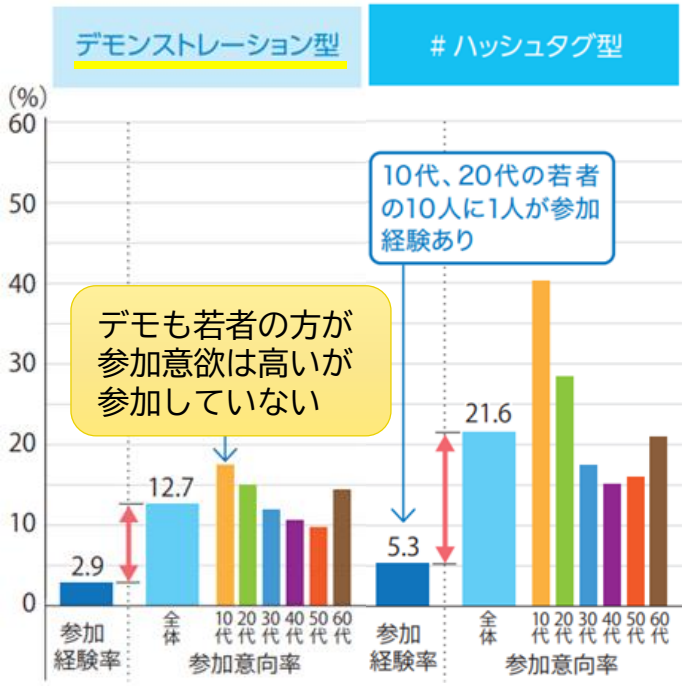
### ③ 社会運動希求層とともに進める参加型運動

社会運動に参加意向があってもできていない
10代・20代層の思いを受け止める運動を進める

＝ 若者とともに進める参加型運動

**2021年**

多様化する社会運動と人々の意識を調査。
10代の6割、20代の5割が労働組合や社会運動は「必要」と回答もその多くが実際の参加に至ってないことが明らかに！

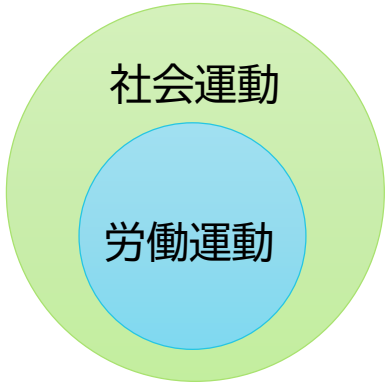



出所：多様な社会運動と労働組合に関する意識調査2021

# 若者とともに進める参加型運動の目的

2022～2023年度運動方針で掲げた第17期連合運動の基軸である
「新しい運動スタイル」の構築に向け、
若者の視点も取り入れ、多くの若者が参加する運動をめざす

新しい
運動スタイルに
**若者の視点も**




社会運動とは、社会問題の解決や、社会の制度や仕組み等の改善を目的として行われる運動。労働運動はその社会運動の代表格。

2021年 4月

多様な社会運動と労働組合に関する意識調査2021（2021年4月公表）

2021年 10月

若者とともに進める参加型運動

取り組み＜その１＞

①Ｚ世代が考える社会を良くするための社会運動調査2022（2022年3月公表）

②座談会「Ｚ世代×社会運動×労働組合」（月刊連合2022年3月号掲載）

2022年 10月

取り組み＜その２＞

③構成組織・地方連合会の次世代を担う若者との意見交換（2022年2月～4月実施）

若者とともに進める参加型運動の考え方

連合アクションイベント開催

構成組織・地方連合会との共有

好事例・先進事例の紹介

現在地

具体的な取り組みの中で、
若者とともに進める参加型運動を展開

実践的な運動に
チャレンジと
検証・評価

# ①Ｚ世代が考える社会を良くするための社会運動調査2022

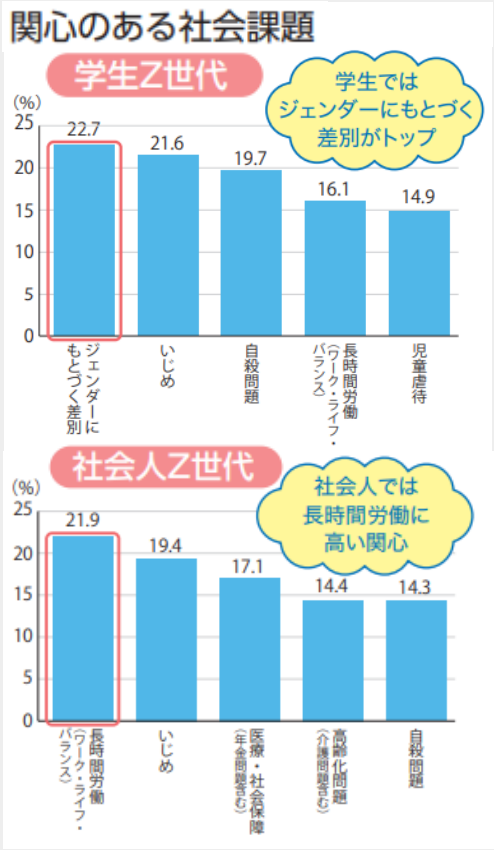
15歳から29歳までのＺ世代を中心とする一般の若者1500人にモバイル調査（2022年3月公表）

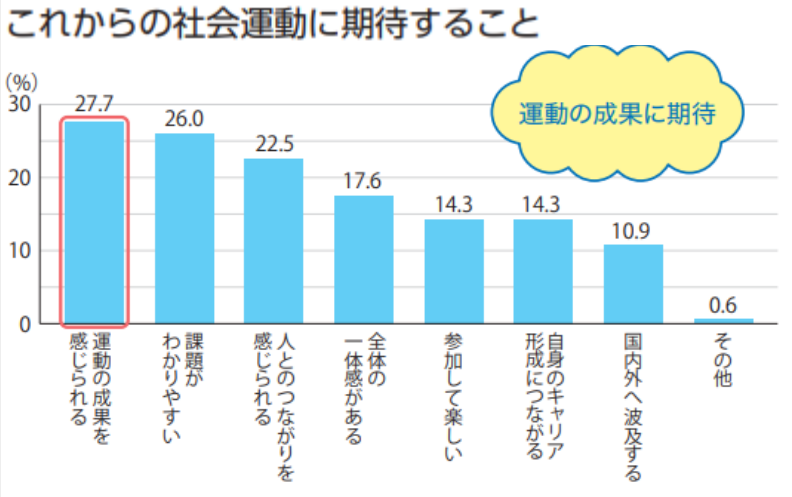
**社会課題**

約９割が関心がある

「身近」な課題に関心が集まる

関心トップ「社会人Ｚ世代」は「長時間労働」
「学生Ｚ世代」は「ジェンダー」




**社会運動**

３人に１人が参加経験あり

「集会やデモ」などを忌避

「成果」と「わかりやすさ」を期待

# ②座談会「Ｚ世代×社会運動×労働組合」

調査結果を受けて、社会運動を牽引する若者、社会運動の研究者と意見交換（月刊連合2022年3月号）

富永京子 とみなが・きょうこ
立命館大学産業社会学部准教授

室橋祐貴 むろはし・ゆうき
日本若者協議会代表理事

**調査から読み解く**

- 今の若者は貧困や格差が自らの課題
  - ➡ 身近で当事者性の高い課題に関心が集まる
- 日本のデモは動員型で対話が乏しい
  - ➡ 忌避感につながる

西良朋也 にしら・ともや
一橋大学社会学研究科博士課程

谷口歩実 たにぐち・あゆみ
#みんなの生理共同代表

**労働運動への期待**

- 労働問題は当事者性が高い
  - ➡ 対話を通して身近な問題を解決
    - ➡ 成果をアピール
      - ➡ 労働組合は『頼れる存在』に

# ③構成組織・地方連合会の次世代を担う若者との意見交換

調査結果や有識者の考察を踏まえて、構成組織・地方連合会の次世代を担う若者計126名と
「新しい労働運動スタイル」のあり方について意見交換（2022年2月～4月実施）

若者から見た
労働運動の課題

専門用語が多い？　デモは恐い？　休日が無くなる？　動員で嫌々？
難しい？　周知不足？　身近でない？　楽しくない？
世代間に溝？　一方通行？　目的不明？
若者の感覚に合ってない？　理解されていない？　成果が見えない？

**労働組合は「人とのつながり」「対話」が重要！**

だからこそ

若者に共感される
工夫を

労働運動を
知る・学ぶ機会を

ＳＮＳの活用で
若者とつながりを

気軽に楽しく参加で
イメージアップも

成果や意義を
感じられるものに

身近な存在、
頼れる存在に

※詳細は別紙参照

# 若者とともに進める参加型運動の考え方

調査結果や意見交換などを踏まえ、若者へのアプローチ方法などの考え方を整理

## 次世代を担う若者の「理解・共感・参加」が得られる運動を

### アプローチの前提となる基盤整備

- 若者が意見を反映しやすい環境の実現
- ＳＮＳによる積極的な発信
- 若者に対する労働運動の理解促進
- 地域・学校と連携した次世代を担う若者への労働運動の理解活動

### 労働運動のイメージアップ

- 運動の意義・目的の明確化と周知
- 参加方法の多様化
- エンターテイメント要素の導入
- わかりやすい言葉での発信
- 運動の経過・成果の適宜共有

※詳細は別紙参照

# 若者とともに進める参加型運動 の今後の取り組み

第17期連合運動の基軸である「新しい運動スタイル」の構築に向けて

キックオフ

７月連合アクションのイベントで「考え方」を共有

＜連合本部＞
- 構成組織・地方連合会と「考え方」を共有
- 好事例・先進事例の収集・展開

＜構成組織・地方連合会＞
- 「考え方」の理解促進
- 好事例・先進事例の展開

２０２３

具体的な取り組みの中で
若者とともに進める参加型運動を展開

実践的な運動に
チャレンジと
検証・評価

新しい運動スタイルに若者の視点も

次世代を担う若者の「理解・共感・参加」で

# 持続可能な労働運動と明るい未来へ

日本労働組合総連合会

Japanese Trade Union Confederation